

琉球大学学術リポジトリ

大学生の希望保有・実現見通し・社会観が時間的展望に及ぼす影響
—看護専門学校生との比較を通して—

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): 時間的展望, 希望保有, 希望の実現見通し, 社会観, 大学生 キーワード (En): 作成者: 高良, 美樹, 金城, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017884

大学生の希望保有・実現見通し・社会観が 時間的展望に及ぼす影響 —看護専門学校生との比較を通して—

高良美樹 Miki TAKARA
金城 亮 Akira KINJO

Effects of university students' hope holding, realization prospects, and social outlook on the time perspective : Through comparison with nursing school students

要 約

本研究の目的は、大学生の希望の保有、実現の見通しおよび社会観が時間的展望にどのような影響を及ぼすかについて検討することであった。大学生329人、看護専門学校生135人を対象に質問紙調査を実施し、分析したところ、得られた主要な結果は、以下の4点であった。①大学生の多くは、希望を有し、実現すると推測する者の比率が高く、その内容としては仕事を選択する者が多かった。②大学生、看護専門学校生ともに現在を重視する者の比率が高く、大学生は、比較的、現在を未来と関連させている者の割合が低かった。③希望を保有することは、将来に対する肯定的見通しに繋がるが、その実現見通しが無いと推測することは、現在・過去に対する肯定的見通しを抑制する傾向があった。④社会観の違いと希望保有・実現見通しとのあいだに関連は無いが、社会に不信を抱くことが時間的展望に抑制的に影響する可能性が示唆された。得られた結果から大学生にとって実現可能な希望を有すること、社会に対して信頼感を抱くことが肯定的な時間的展望につながる可能性があることが示唆された。

Key word : 時間的展望, 希望保有, 希望の実現見通し, 社会観, 大学生

背景と目的

Lewin (1951) は、個人の生活空間(一定時に存在する心理学的場)が現在の状況のみに限定されずに、過去および未来の影響を被るものと考えた。そして、ある特定時点における個人の心理学的な過去・現在・未来の総体を時間的展望と呼び、心理学的未来の重要性を強調した。

その指摘を踏まえ、その後、実証的な検討がなされてきたが、時間的展望の測定方法の不統一により研究知見の蓄積が妨げられてきた。白井(1994)は、それまでの時間的展望に関する尺度構成の研究成果を踏まえ、大学生を対象として尺度の標準化を行った。その後、同尺度を用いた大学生を対象とした研究においては、外的統制群に比して内的統制群の方が現在・未来ともに肯定的に捉えていること(杉山・神田, 1996)、首尾一貫感覚が高い者は、過去・現在・未来のいずれの時点においても自己を肯定的に認知していること(園田・森川, 2005)、ポジティブな時間的展望を持つ者の精神的健康度が高いこと(日湯・齋藤, 2007)、アイデンティティ確立には、未来がもっとも関連性が高いが、現在・過去への時間的展望も正の関連性があること(石井, 2016)、大学在学中、時間的展望の未来と現在の側面が肯定的方向へ変化し、それが卒業後も維持され、卒業1年目のアイデンティティ形成に影響を与えること(白井, 1999, 2003)などが明らかになっている。

また、都筑(1999a)は、大学生の時間的展望の認知、感情・評価、欲求・動機といった多様な側面を測定、評価するための方法として質問項目によるもの以外にサークル・テスト、梯子評定法といった投影法的な技法を開発し、その信頼性・妥当性について検討した。それらの技法を活用し、大学生の時間的展望の一般的な傾向が未来志向的で、将来目標への強い欲求に支えられ、統合された過去・現在・未来の関係の上に、自身の目標が設定されることを示した(都筑, 1999a)。

つまり、青年の時間的展望に関する従来の研究の多くは、Lewin (1951) 以

来の未来志向性の強調，目標設定とその達成にむけての動機づけを重視してきたと言える（白井,2001; 都筑,2004）。いわば，将来に希望を抱き，その実現に向けて現状において努力を継続する青年像が暗黙裏に規範的モデルとして設定されてきた。

心理学以外の学問領域としては，東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト（2006）が，希望という概念を個人の心理や感情の一つとしてではなく，「個人の保有する希望自体，その置かれた社会環境によって影響される可能性」を重視し，「個々人が形成する希望が，ひいては社会全体の動向にも影響を与えていく可能性」をもつものとして捉え直している（玄田,2008）。つまり，希望は，「社会の産物もしくは原動力」という側面があるという指摘であり，これは，個人と社会の相互規定性に着目する点において社会心理学の研究視座と共通性を有する。このプロジェクトは，「希望学」という学問領域を立ち上げ，社会科学の多様な領域と関連した側面について全国規模の調査，また，岩手県釜石市における地域調査の実証データに基づき，希望の社会的位相について検討・考察している。このプロジェクトの背景として，日本の社会全体の見通しの暗さが個々人の希望の喪失をもたらし，個人において希望を失うことが社会全体の活力の低下に繋がる閉塞的な悪循環に陥っているという現状および時代に対する認識とそこからの脱却に何が必要かという問題意識がある。これは，個人というミクロな観点に重点をおく傾向のある心理学が見落としがちなの視点であると言えよう。また，玄田（2010）は，若年雇用問題と関連して，問題を抱える若者の多くに共通する欠落として自分・社会・働くことに対する希望があると指摘している。これは，希望の保有・実現可能性といったことがとくに青年にとって重要であり，社会課題でもあることの指摘と言えよう。だが，従来，希望に関する研究が心理的側面に偏りがちであったことへの反省・批判によるのか，このプロジェクトに心理学研究者は含まれず，他方，心理学における時間的展望，希望・将来目標に関する研究においてこれらの研究知見が引用されることは少ない。

従来の時間的展望研究は、個人内の経験が過去・現在・未来へと関連づけて意味づけられることの検討に力点を置く一方で、社会との関連の中で希望・将来目標が設定されるため、その実現可能性についての推測が社会環境による影響を被ることについて十分に検討がなされてきたとはいえない可能性がある。例外的に、白井(1990)は、中学生対象の調査の分析結果から、彼らが社会に対しては否定的な未来像を抱く一方で、自己と仲間については、中性的な未来像を描くといったギャップについて示した。この結果は、自己の未来展望と社会の未来展望と分離してイメージしている可能性、すなわち中学生にとって自己と社会とを関連づけながら将来展望を抱くことの困難さを示唆したとも考えられる。五十嵐(2020)は、大学生対象に調査を実施し、社会観と時間的展望体験との関連について検討している。分析の結果、社会を肯定的に捉えている者ほど時間的展望体験の各側面について肯定的な捉え方をしていることが明らかになった。このような有益な研究知見が示されつつあるが、それらは散発的で十分な研究蓄積がなされているとはいえない。

そこで本研究においては、大学生が希望を保有し、それを実現可能あるいは不可能とみなすことが時間的展望にどのような影響を及ぼすのか、社会をどのように見ているかと希望の保有とがどのように関連し、社会に対する見方が時間的展望にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする。なお、大学生の実態および分析結果について評価・検討するために看護専門学校生(以下、看護学生)を比較対照群とした。これは、いずれも高等学校卒業後の教育課程にあり、年齢的にほぼ近似している点において共通している一方、大学生が卒業後の進路について未決定・保留である者を多く含み、看護学生が将来、看護師になるという意味決定に基づき進路決定した早期完了型が大半であるという点において対比をなすことを理由とする。この対比が、希望の保有、時間的展望体験に如何なる差異をもたらすかの検討を通して本研究の結果が青年一般にどの程度適用可能かについても吟

味できると考えられる。

方 法

調査対象者

大学生 329 人（女子 196 人，男子 126 人，不明・無回答 7 人，1 年生 103 人，2 年生 118 人，3 年生 94 人，4 年生 14 人，平均年齢 = 19.66，SD = 1.15），看護学生 135 人（女子 105 人，男子 29 人，不明・無回答 1 人，全員 1 年生，平均年齢 = 20.06，SD = 4.69），合計 464 人であった。

質問紙調査の手続きと倫理的配慮

大学生に対しては，沖縄県内の R 大学，M 大学における心理学関連の授業科目の受講生に対して調査協力を依頼し，Google Form を用いて調査を実施した。看護学生に対しては，沖縄県内の G 看護専門学校，H 看護専門学校の心理学関連の授業科目の受講生に対して授業時間を利用して質問紙を配布し，1 週間後の授業時に回収した。Google Form による調査実施に要した時間は 15 分程度であった。

なお，対象者に対する倫理的配慮として，調査実施時に以下のように教示し，調査依頼をおこなった。教示内容は，以下の 2 点であった。①本調査は，匿名性を保って実施され，回答協力の有無は，授業成績とは無関係であること。②回答協力は，任意であり，調査全体，質問項目単位でも回答しないことが可能であること。さらに，データの管理方法や研究目的以外でデータを用いないことを書面，及び口頭で説明した。

質問紙の構成

質問紙は，性別と年齢，所属を尋ねる項目および以下の尺度および質問項目で構成した。質問は，最初にデモグラフィック変数について尋ね，尺度等については，以下に述べる順序で実施した。

調査内容

デモグラフィック変数

性別、年齢、所属、学年、希望進路などについて尋ねた。なお、希望進路については、複数回答可とした。

時間的展望体験尺度

白井(1994)によって標準化された18の質問項目を用いた(Table.5に分析結果に基づき整理した16項目を示した)。各質問項目に対する回答は、“あてはまらない”(1点)～“あてはまる”(5点)の5件法を用いた。

希望保有・実現可能性など

東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト(2006)、玄田(2008,2009)に基づき、希望の有無、内容、実現可能性、実現時期について尋ねた。

最重要する時間

「過去、現在、未来」のうちで、わたしにとって一番大切なのは、〈 〉です。あてはまる選択肢を選んでください。」と教示し、単一選択の回答を求め、その選択理由について自由記述による回答を求めた(Shirai,1997;白井,2001)。

社会観尺度

峰尾(2017)が大学生を対象の調査に基づき自由記述から項目を構成し、標準化した38の質問項目を用いた(Table.6に上記同様、分析結果に基づき整理した25項目を示した)。この尺度項目については、大学生対象の調査にのみ用いた。各質問項目に対する回答は、“あてはまらない”(1点)～“あてはまる”(5点)の5件法を用いた。

モデルの有無

働く人のモデルの有無について質問し、該当者が存在するとの回答を得た場合、相手との関係、職種について尋ねた。なお、本論文においては、「モデルの有無」は、検討の対象としなかった。

調査時期 調査は、2021年6月から7月にかけて行われた。

結 果

希望保有・実現可能性など

「現在、あなたは将来に対する「希望」(将来実現してほしいこと・実現させたいこと)がありますか。」と教示し、希望の有無について尋ねた。大学生で回答者全体の 82.7%，看護学生で 96.3%が何らかの希望を有しているとの回答結果が得られた。回答傾向と所属とのあいだの関連は有意であり ($\chi^2(1) = 15.17, p < .01$)，大学生に比して看護学生において、より多くの回答者が希望を有していた。

Table.1 希望の有無 (大学生と看護専門学校生の比較)

希望がある	有効回答数に占める割合 (%)		
	大学生	看護学生	全体
	82.7	96.3	86.6
そのうち			
1)その希望は実現できる	24.6	32.0	27.0
2)その希望はたぶん実現できる	65.1	60.9	63.7
3)その希望はあまり実現できそうにない	9.2	7.0	8.5
4)その希望は実現できそうにない	1.1	0.0	0.8
1)と2)についていつ実現できるか (最も早い内容)			
1年以内	16.9	2.6	12.1
2～4年	25.5	30.4	27.2
5～9年	30.3	37.4	32.7
10年以上	27.3	29.6	28.0

小数点以下の丸め誤差のため、総計は100%とならないことがある。

希望を有していると回答した者に対して、その実現可能性の見通しについて尋ねた結果を Table.1 に示した。実現できるとの回答は、大学生の場合、89.7%，看護学生で 92.9%であった (いずれも「実現できる」「たぶん実現できる」の両選択肢の合算)。希望を有しつつも実現の見込みがないとみなす者の比率は、大学生で 10.3%，看護学生で 7.0%であった。回答傾向と所属とのあいだの関連は、有意ではなく ($\chi^2(3) = 3.89, n.s.$)，両サンプルに共通して、9割程度の者が希望は実現できるとの見通しをもっていた。また、希

望が実現できると回答した者に対して「その希望はいつ頃実現できそうですか。最も早く実現できそうなものの年数についてお答えください。」と教示し、実現の時期についての推測を尋ねた。両サンプルに共通して2～4年、5～9年、10年以上とする回答者の比率が、それぞれ3割程度であり同様の傾向がみられた (Table.1)。一方、1年以内と回答する者の比率が両サンプルで異なっており、大学生で16.9%、看護学生で2.6%であった。そのため、回答傾向と所属とのあいだの関連が有意となった ($\chi^2(3) = 14.89, p < .01$)。

Table.2 希望の内容 (大学生と看護専門学校生の比較)

有効回答者における各項目の選択比率 (%)

	大学生	看護学生	合計	関連の有意性
仕事	82.7	89.1	84.8	
遊び	51.5	48.1	50.4	
友達との関係	48.2	58.9	51.6	*
恋愛	47.4	38.0	44.4	
結婚	46.3	41.9	44.9	
学習	38.2	25.6	34.2	*
容姿	37.5	27.9	34.4	
家族	30.1	45.0	34.9	**
健康	29.4	34.1	30.9	
社会貢献	28.3	30.2	28.9	

*p<.05 ** p<.01

希望を有していると回答した者に対して、その希望がどのような内容に関するものなのか、10個の選択肢を提示し、複数選択可で回答させた結果が Table.2 である (内容の表示順は、大学生が選んだ比率の高い順からとした。11個目の選択肢として「その他」も用意したが、選択率が低く、内容が多岐に渡っていたことから今回の分析対象から除外した。)。大学生、看護学生の選択数の平均値は、4.40と一致しており、両サンプル間で違いがなかった ($t(399) = .034, p = .973, n.s. d = 0.00$)。最も多く選ばれていたのは、両サンプルに共通して「仕事」に関する希望であり、大学生で82.7%、看護

学生で 89.1%の者が選択していた。それに次ぐものとして「遊び」「友達との関係」「恋愛」「結婚」となっており、「友達との関係」以外は所属と選択率とのあいだに有意な関連はなく、4割から半数程度の者がそれらの項目を選択していた。「友達との関係」については、所属と選択率の関連が有意であり ($\chi^2(1) = 4.05, p < .05$)、看護学生において選択率が高く、6割近い者が選択していた。それ以降において両サンプルにおいて選択率が異なっているのは、「学習」と「家族」であり、前者は大学生、後者は看護学生において選択率が高くなっていた (順に $\chi^2(1) = 6.22, p < .05$; $\chi^2(1) = 8.45, p < .01$)。大学生において最も選択率が低かったのは、「社会貢献」であり 28.3%の選択率であった。ただし、看護学生における選択率も 30.2%に留まり、所属の違いによる選択率の違いは有意とはならなかった。

最重要する時間

過去・現在・未来の中で最重要する時間の択一選択を求め、その理由について尋ねたところ、両サンプルに共通して、現在を選択する者の比率が高く (大学生 77.6%; 看護学生 80.9%)、次いで未来 (20.2%; 16.5%)、過去 (2.2%; 2.6%) という順番であった。所属の違いによる選択率の違いは、いずれも有意ではなかった。そのため、両群をコミにした分析を実施することとした。希望の有無、および、その実現可能性の組み合わせ (以下、希望保有・実現可能性とする) を用いて、調査協力者を実現可能な希望を有する群 (実現可能希望群)、実現不可能な希望を有する群 (実現不可能希望群)、希望を持たない群 (希望無し群) の 3 群に分けた。希望保有・実現可能性と過去・現在・未来のどの時点を重視するかの関連について検討するため、クロス表を作成し、分析した結果、両変数のあいだには、有意な関連があり ($\chi^2(4) = 10.47, p < .05$)、実現可能希望群は、現在を重視し、希望無し群は、相対的に過去を重視する者の比率が高かった (Table.3)。

**Table.3 希望保持・実現可能性と重視する時間のクロス表
の各セルに含まれる人数 (比率)** (全サンプル)

		実現可能 希望群	実現不可能 希望群	希望無し 群	全体
過去	人数(比率)	9(2.6)	0(0.0)	6(10.0)	15(3.4)
	期待度数	11.8	1.2	2.0	15
現在	人数(比率)	276(78.6)	28(7.8)	42(70.0)	346(77.4)
	期待度数	271.7	27.9	46.4	346
未来	人数(比率)	66(18.8)	8(22.2)	12(20.0)	86(19.2)
	期待度数	67.5	6.9	11.5	86
合計	人数	351	36	60	447

**Table.4 希望保持・実現可能性と時間関連記述の有無とのクロス表の
各セルに含まれる人数 (比率)** (全サンプル)

		実現可能 希望群	実現不可能 希望群	希望無し群	全体	
大学生	関連あり 記述	人数(比率)	124(53.7)	15(60.0)	18(36.0)	157(51.3)
		期待度数	118.5	12.8	25.7	157.0
	関連なし 記述	人数(比率)	107(46.3)	10(40.0)	32(64.0)	149(48.7)
		期待度数	112.5	12.2	24.3	149.0
合計	人数	231	25	50	306	
看護学生	関連あり 記述	人数(比率)	78(75.7)	5(62.5)	1(33.3)	84(73.7)
		期待度数	75.9	5.9	2.2	84.0
	関連なし 記述	人数(比率)	25(24.3)	3(37.5)	2(66.7)	30(26.3)
		期待度数	27.1	2.1	0.8	30.0
合計	人数	103	8	3	114	
合計	関連あり 記述	人数(比率)	202(60.5)	20(60.6)	19(35.8)	241(57.4)
		期待度数	191.7	18.9	30.4	241.0
	関連なし 記述	人数(比率)	132(39.5)	13(39.4)	34(64.2)	179(42.6)
		期待度数	142.3	14.1	22.6	179.0
合計	人数	334	33	53	420	

*比率・期待度数は、サンプル・群ごとに算出した。

次いで Shirai (1997), 白井 (2001) に基づき, 現在あるいは, 未来を重視すると回答した者に限定して, 選択理由に関する自由記述に時間的連続性への言及が含まれているか否かという観点で対象者を分類した上で希望保有・実現可能性との関連についてサンプル別に検討した (Table.4)。大学生については, 両変数の関連が有意傾向であり ($\chi^2(2) = 5.97, p < .10$), 実現可能希望群は, 時間的連続性について記述する者の比率が高く, 希望無し群は, 言

及しない者の比率が高かった。看護学生については、両変数のあいだに有意な関連は無かった。また、両群をコミにした分析においては、有意な関連があり ($\chi^2(2) = 11.50, p < .01$)、大学生にみられた特徴がより顕著であった。両群のあいだにみられる差異として全般的に時間連続性に言及する者の比率が大学生において相対的に低いということがあげられる。看護学生全体の73.7%が時間的連続性について言及しているのに比して、大学生では51.3%に留まっていた (Table.4)。

尺度構成

時間的展望体験尺度について、大学生と看護学生を合併したサンプルを対象に、逆転項目を得点変換した上で白井(1994)に基づき、因子分析(バリマックス回転)を実施した。まず、全18項目について因子数を指定せずに分析を実施したところ、4因子が抽出され、回転後の累積寄与率は、50.8%となった。共通性がとくに低い項目は見あたらなかったが、複数の項目がいくつかの因子に負荷しており、因子所属が不明瞭であった。また、4因子に負荷量の高い項目は、1項目のみであった。そこで、3因子を抽出するように指定して再度、分析を実施した。回転後の累積寄与率は、46.0%と若干、低下し、共通性の低い項目(「私は、自分の過去を受け入れることができる。」この項目は、因子数を指定しなかった場合に4因子を構成していた項目である)が1つ複数の因子に負荷しており、他に因子所属が不明瞭な項目(「私には、未来がないような気がする。」)が1つあった。そこで、この2項目を除外し、16項目について3因子を抽出するよう設定して分析を継続した。その結果、白井(1994)による“目標指向性”5項目と“希望”3項目が1つの因子としてまとめられ、第1因子として抽出された。第2因子の5項目、第3因子の3項目については、白井と同様の項目が因子としてまとまった (Table.5)。3因子抽出後の寄与率は、47.7%となり、白井の45.8%とほぼ同様の値であった。

Table 5 時間的展望体験尺度の因子分析結果 (16項目版)

項目	F1	F2	F3	共通性
F1: 将来に対する肯定的志向性 ($\alpha = .850$)				
私には、だいたい将来計画がある	0.82	0.05	-0.04	0.67
私には、将来の目標がある	0.80	0.01	0.02	0.64
私の将来は漠然としていてつかみどころがない*	0.66	0.17	0.19	0.49
将来のために考えて今から準備していることがある	0.65	0.06	-0.21	0.47
私の将来には、希望ももてる	0.60	0.28	0.16	0.46
自分の将来は自分でできひらく自信がある	0.53	0.18	0.05	0.32
10年後、私はどうなっているのかよくわからない*	0.49	0.25	0.08	0.31
将来のことはあまり考えたくない*	0.49	0.22	0.27	0.36
F2: 現在の充実感 ($\alpha = .803$)				
毎日の生活が充実している	0.26	0.71	0.13	0.59
今の生活に満足している	0.14	0.71	0.11	0.53
毎日が同じことのくり返しで退屈だ*	0.10	0.69	0.11	0.50
毎日がなんとなく過ぎていく*	0.29	0.67	0.09	0.54
今の自分は本当の自分ではないような気がする*	0.02	0.44	0.28	0.27
F3: 過去の受容 ($\alpha = .734$)				
私の過去はつらいことばかりだった*	-0.02	0.08	0.77	0.60
過去のことはあまり思い出したくない*	0.09	0.15	0.66	0.47
私は過去の出来事にこだわっている*	0.07	0.19	0.60	0.40
因子分散	3.48	2.45	1.71	7.64
寄与率 (%)	21.76	15.31	10.67	47.74

因子抽出法: 主因子法
 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
 * 逆転項目

第1因子に負荷量が高い質問項目としては、「私には、だいたい将来計画がある。」「私には、将来の目標がある。」「私の将来は漠然としていてつかみどころがない。」「(逆転項目)」などが含まれており、いずれも白井において“目標指向性”を構成する項目であった。“希望”を構成していた「私の将来には、希望ももてる。」「自分の将来は自分でできひらく自信がある。」「10年後、私はどうなっているのかよくわからない」(逆転項目)については、比較的、因子負荷量が低かった。これらの項目に共通するのは、自身の未来に対する肯定的展望に基づいている点である。そのことから、第1因子を“将来に対する肯定的志向性”と命名した。第2因子は、「毎日の生活が充実している。」「今の生活に満足している。」などの5項目であり、第3因子は、「私の過去はつ

らいことばかりだった。」「過去のことはあまり思い出したくない」（いずれも逆転項目）などの3項目であった。この2つの因子を構成する項目は、白井（1994）と一致していることから、白井に倣い“現在の充実感”“過去の受容”と命名した。各因子の信頼性について検討するため、因子ごとのクロンバックの α 係数を算出したところ、順に.850, .803, .734となり、概ね良好な値が得られた。

次に社会観尺度について、大学生サンプルを用いて逆転項目を得点変換した上で、因子分析（バリマックス回転）を実施した。最初に全38項目を用いて、因子数を指定せずに分析を実施したところ、9因子が抽出されたが、回転後の累積寄与率は、44.5%に留まった。共通性がとくに低い項目は見あたらなかったが、いくつかの項目が複数の因子に負荷しており、因子所属が不明瞭となった。そこで、峰尾（2017）に基づき、3因子を抽出するよう設定して分析を実施した結果、因子抽出後の寄与率が30.2%と低下した。そのため、共通性の低さ、および因子所属の不明瞭さに基づき、13項目を分析対象から除外した（除外項目は、「自分中心に動く人が多い。」「差別や偏見がある。」「努力すれば報われる社会だ。」「生きるだけならとりあえず生きていける社会である。」などであり、峰尾の結果における別々の因子を構成している項目であった）。25項目に整理した上で再度、3因子を抽出するよう設定して分析を実施したところ、因子抽出後の寄与率は34.5%と若干改善され、とくに共通性が低い項目、因子所属が不明瞭な項目は無かった（Table.6）。各因子のクロンバックの α 係数は、順に.879, .701, .663となり、信頼性は概ね良好であった。

Table.6 社会観尺度の因子分析結果 (25項目版)

項目	F1	F2	F3	共通性
F1: 社会不正・非寛容性に対する否定的評価 ($\alpha = .879$)				
常に誰かを誹謗・中傷している社会だ	0.65	0.03	0.12	0.44
国の方針を国民と共有できていない	0.65	0.15	-0.11	0.46
正直者がバカを見ることが多い	0.64	0.07	-0.15	0.43
マスメディアの報道が一面である	0.63	0.20	0.10	0.45
先行きが不安な社会である	0.63	-0.02	-0.15	0.42
正しいことが通りにくい	0.62	-0.04	0.11	0.40
不満ばかり言う人が多い	0.61	0.03	0.08	0.37
事実がきちんと報道されない	0.60	-0.01	0.20	0.40
お金がものをいう社会だ	0.59	0.15	-0.12	0.39
マスメディアが伝える情報によって人々がおどらされている	0.58	0.10	0.18	0.38
日本のトップにいる人達は自分達のこじか考えていない	0.51	-0.09	-0.06	0.28
経済的に不安定である	0.51	-0.14	-0.06	0.29
少数派の人が社会的不適合者であるかのように扱われる	0.49	-0.03	-0.05	0.25
お金がないと何もできない	0.47	0.06	-0.05	0.22
他人に対して無関心な人が多い	0.45	0.11	-0.19	0.25
F2: 生活の安定性に対する肯定的評価 ($\alpha = .701$)				
治安が良い	-0.02	0.62	0.16	0.41
便利な社会である	0.15	0.54	0.05	0.32
社会全体は平和である	-0.17	0.52	0.10	0.31
生存の心配がなく生活できる	-0.06	0.50	0.08	0.26
この社会にはそれなりに楽しいことがある	0.14	0.50	0.10	0.28
物質的に豊かである	0.16	0.50	0.06	0.28
F3: 個人の努力の尊重 ($\alpha = .663$)				
本人の頑張り次第でお金持ちになれる社会だ	0.01	0.16	0.65	0.44
社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ	0.03	0.08	0.64	0.41
何事も社会のせいではなく、結局は自分(本人)次第である	0.00	0.09	0.51	0.27
自分のやりたいことを見つけれられる社会である	-0.12	0.20	0.42	0.23
因子分散	5.157	1.921	1.553	8.631
寄与率 (%)	20.628	7.683	6.212	34.523

因子抽出法: 主因子法

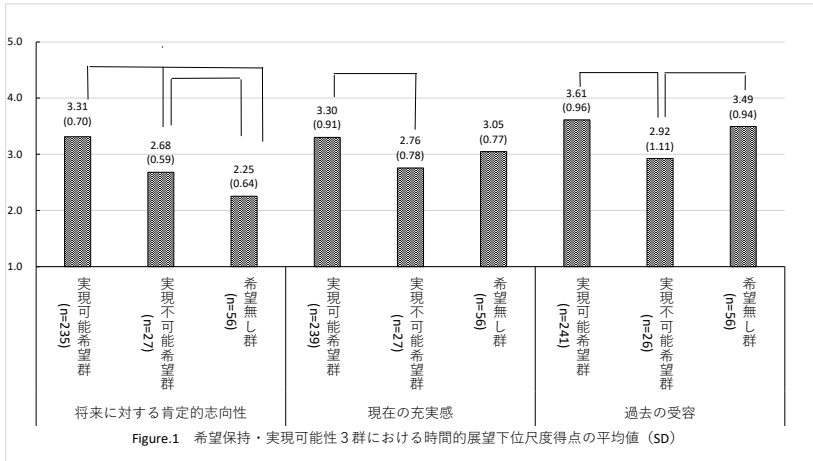
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

第1因子に負荷量が高い質問項目としては、「常に誰かを誹謗・中傷している社会だ。」「国の方針を国民と共有できていない。」「正直者がバカを見る人が多い。」などの15項目があり、全て峰尾の“自己中心性・独善性に対する否定的評価”に含まれていたものである。ただし、峰尾の分析結果における代表的な項目(例えば、「自分中心に動く人が多い。」「差別や偏見がある。」など)は、削除対象となった。そのため、因子名について検討し、“社会不正・非寛容性に対する否定的評価”と改めた。第2因子には、「治安が良い。」「便利な社会である。」などの6項目、第3因子には、「本人の頑張り次第でお金

持ちになれる社会だ。」「社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ。」などの4項目が含まれていた。これらは、いずれも峰尾の“生活の安定性に対する肯定的評価”“個人の努力の尊重”因子に所属する質問項目と共通していたことから同じ因子名とした。

希望保有・実現可能性が時間的展望に及ぼす影響

看護学生については、実現可能希望群、実現不可能希望群、希望無し群の群分けに対応する者の比率が順に88.8%、6.7%、3.7%となり（質問項目単位での回答者数が異なるため合計は100%にならない。以下も同様。）、各群に属する人数分布が極端に偏っていた。そのため、以下においては、大学生サンプルのみを分析対象とした。大学生の場合、上記群分けに対応する者の比率は、順に74.2%（244人）、8.5%（28人）、17.3%（57人）であった。希望保有・実現可能性が時間的展望に及ぼす影響について検討するため、実現可能希望群、実現不可能希望群、希望無し群の3群を独立変数として設定し、時間的展望尺度の3つの下位尺度得点（下位尺度ごとに各質問項目への回答を合算した後、項目数で除した値）を従属変数とした分散分析を実施した（Figure.1）。将来に対する肯定的志向性についての分析結果は、有意であり（ $F=59.27, df=2/315, p<.01$, 効果量 $f=0.417$ ）、多重比較の結果（Tukey HSD, 以下同様）、全ての群のあいだに差があった。現在の充実感についての分析結果は、有意であり（ $F=5.82, df=2/319, p<.01$, 効果量 $f=0.166$ ）、多重比較の結果、実現可能希望群が実現不可能希望群よりも得点が高かった。過去の受容についての分析結果も有意であり（ $F=6.01, df=2/320, p<.01$, 効果量 $f=0.187$ ）、多重比較の結果、実現不可能希望群に比して他の2群において得点が高かった。



社会観と希望保有・実現可能性との関連，社会観の違いが時間的展望に及ぼす影響

大学生サンプルについて社会観尺度の3つの下位尺度ごとの因子得点を用いてクラスター分析を実施した。探索的にクラスター数を3から5まで設定し，クラスター間の区別が明瞭で解釈可能性が高くなるような結果について検討し，3クラスターが妥当であると判断した (Figure.2)。第1クラスターは，生活の安定性，個人の努力尊重という社会の肯定的側面を重視していることから社会信頼群とした。第2クラスターは，社会不正・非寛容性に対する否定的評価が高いことが特徴的であることから社会不信群とした。また，第3クラスターは，社会不正・非寛容性に対する否定的評価が低い一方，生活の安定性も低く評価していることから社会葛藤群とした。

各クラスターと希望保有・実現可能性との関連について検討するために3 (クラスター) × 3 (実現可能希望群・実現不可能希望群・希望無し群) のクロス表 (Table.7) を用いて分析を実施したが，有意な関連は無かった ($\chi^2(4) = 4.89, n.s.$)。

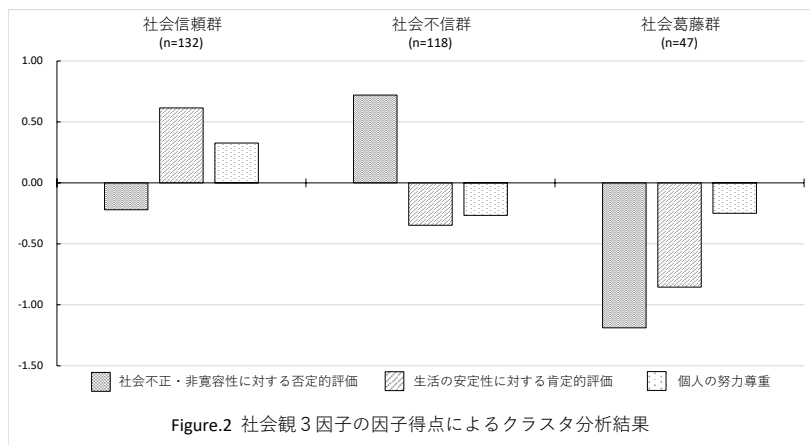
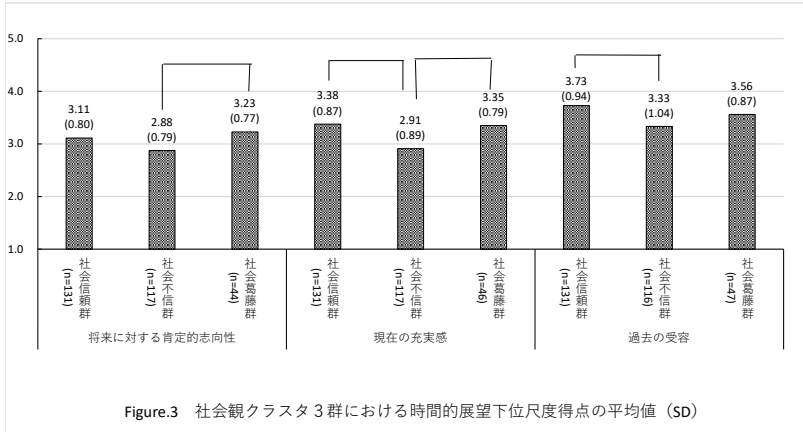


Table.7 社会観クラスターと希望保持・実現可能性のクロス表の各セルにおける人数(比率) (大学生サンプル;有効回答のみ)

		社会信頼群	社会不信群	社会葛藤群	全体
実現可能希望群	人数(比率)	98(74.2)	83(70.3)	36(76.6)	217(73.1)
	期待度数	96.4	86.2	34.3	217.0
実現不可能希望群	人数(比率)	7(5.3)	15(12.7)	4(8.5)	26(8.8)
	期待度数	11.6	10.3	4.1	26.0
希望無し群	人数(比率)	27(20.5)	20(16.9)	7(14.9)	54(18.2)
	期待度数	24.0	21.5	8.5	54
合計	人数	132	118	47	297

次に、社会観の違いが時間的展望に及ぼす影響について検討するため、3つのクラスターを独立変数、時間的展望尺度の3つの下位尺度得点を従属変数とした分散分析を実施した (Figure.3)。将来に対する肯定的志向性についての分析結果は有意であり ($F=4.31, df=2/289, p<.05$, 効果量 $f=0.134$)、多重比較の結果 (Tukey HSD)、社会不信群が社会葛藤群に比して低かった。現在の充実感についての分析結果は有意であり ($F=9.80, df=2/291, p<.01$, 効果量 $f=0.226$)、多重比較の結果、社会不信群が他の2群に比して低かった。

過去の受容についての分析結果も有意であり ($F=4.79, df=2/291, p<.01$, 効果量 $f=0.183$), 多重比較の結果, 社会信頼群が社会不信群に比して得点が高かった。



考 察

本研究は, 希望の保有・実現可能性に関する東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト (2006) および玄田 (2008,2009) で得られた知見を大学生に焦点を当てて検討すること, また, 時間的展望研究と関連づけることを通して, 大学生にとって希望を持つことが時間的展望にどのような影響を及ぼすかについて探索的に検討することが目的であった。さらに, 大学生が現代の日本社会をどのように見ているか (社会観) によって希望の保有に違いがあるか, 社会観が時間的展望に与える影響についてもあわせて検討を試みた。

現代青年における希望の様相

大学生で回答者全体の 82.7%, 看護学生で 96.3% が何らかの希望を有しており, 大学生に比して看護学生において, より多くの回答者が希望を有していた (Table.1)。さらに, 両サンプルに共通して, 9 割程度の者がその希望は実現できるとの見通しをもっていた。また, 希望の内容については, 「仕

事」の選択比率が両サンプルで高く、8割から9割の者が選択していた。一方、「社会貢献」が低位であることも共通しており、3割程度の選択率であった（Table.2）。東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト（2006）による全国の20歳以上59歳以下（20代22.2%）の男女を対象とした調査においては、希望を有する者は78.3%、その中で希望実現の見通しを持っている者は80.7%であった。個人属性の中で、希望の保有や実現可能性に促進的に影響している変数は、年齢であり、若い年齢層ほど保有率、実現可能性ともに高かった。希望の様相に影響を及ぼす他の変数としては、最終通学歴（最後に通った経験のある学校）があげられており、高等教育の進学経験のある者ほど希望の保有およびその実現可能性を高く見積もっていた。また、希望内容の中で最も選択率の高かったのは、本調査同様「仕事」であり、若い世代ほど選択率が高かった（玄田,2008）。

つまり、青年は、他の世代に比して希望を有する者の比率が相対的に高く、とくに就学中の青年において学習内容が将来の仕事に深く結びついている場合、その傾向が顕著であると言えよう。今回の調査対象においては、看護学生がそれに相当する。大学生において希望を有する者の比率は、全国調査に比して僅かに高い程度に留まった。大学生においても希望内容として「仕事」を選択する比率が高いことを勘案すると、大学生の多くが将来の仕事選択に関して未決定・保留でありうること、あるいは、大学での学業と仕事の関連性が不明瞭で、現状における取り組みと将来の仕事とを関連づけるのに困難を有する可能性があることが示唆されよう。大学生の卒業後の進路選択の過程が時間的展望の様相と関連しており、進路について決定している者の方が未決定の者よりも現在を肯定的に捉えていることが示されていること（都筑,1999b）から大学におけるキャリア教育とそれを踏まえて学生自身が大学教育の意義を捉え直すことが重要だと考えられる。

また、今回の調査結果に特徴的なこととして希望の実現可能性を高く見積もっていることがあげられる。玄田らの結果において希望を持っている者

の中でそれを実現可能とする比率が8割程度に留まっているのに対し、今回の調査においては、9割程度の者が希望は実現できるとの見通しをもっていった。これは、両調査の調査対象者の属性の違いによると推測される。全国調査においては、20歳以上59歳以下(20代22.2%)の男女を対象としていたが、今回の調査においては、平均年齢20歳前後の就学中の青年を対象とした。全国調査において年齢、および、最終通学歴が希望保有・実現可能性の推測を促進していたが、今回得られた結果は、それと一貫すると言えよう。

希望保有・実現可能性と時間的連続性の言及の有無との関連について検討した結果(Table.4)、大学生については、両変数の関連が有意傾向であり、実現可能希望群は時間的連続性について記述する者の比率が高く、希望無し群は言及しない者の比率が高かった。また、全般的に時間連続性に言及する者の比率が看護学生に比して大学生において相対的に低かった。これは、看護学生が将来の仕事として看護師になることを前提として学校選択を行い、資格取得に向けて整備されたカリキュラムに基づく学習活動に従事していることと関連していると考えられる。つまり、これも青年期における職業と関連した進路選択の重要性を示唆する結果であると言える。今回の調査対象者の大学生において1・2先生の占める比率が高かった(合計で67.2%)。大学生の中には、将来従事する仕事について未決定・保留か、あるいは、慎重な決定を期すための時間的猶予を得るために進学した者も含まれると推測される。学年の進級につれて将来への希望が高まることが明らかにされており(都筑,1999b)、青年が時間的連続性の中に自らを位置づけるには、実現可能な希望を抱くことが有効であり、それが仕事と関連している場合に有効性はより高まること、大学教育の中でそれを涵養することが可能かつ重要であることを示唆する結果だと言えよう。

希望保有・実現可能性が時間的展望に及ぼす影響

大学生を対象として希望保有・実現可能性が時間的展望に及ぼす影響について検討した結果、将来に対する肯定的志向性について、全ての群のあい

だに有意な差があった (Figure.1)。すなわち、希望を持たない者は、将来に対して肯定的に向かっていく姿勢に乏しく、実現不可能な希望を有する場合も同様の傾向があると言える。実現可能な希望を有する者の場合でも得点平均値は、中位点付近の値 ($M=3.31$) に留まっている。このことから実現可能な希望を持つことは、青年が将来に向けて中立的な状態であることを支えているとも考えられよう。現在の充実感についての分析結果においては、実現可能群が実現不可能群よりも有意に得点が高かった。有意差には達していないが、実現不可能群は、希望無し群よりも得点が低い傾向にあった。さらに、過去の受容について実現不可能群に比して他の2群において得点が有意に高かった。一方、現在充足、過去受容のいずれの得点についても希望無し群と実現可能群とのあいだに有意な差は無かった。つまり、実現不可能な希望をもつことは、希望を持たないことに比べても現在の充足、過去の受容に抑制的に影響する可能性があると言えよう。希望を有する青年にとって、その実現可能性の有無が重要であることを示唆する結果である。

社会観と希望保有・実現可能性の関連、社会観が時間的展望に及ぼす影響

社会観に基づく3クラスター（社会信頼群・社会不信群・社会葛藤群）と希望保有・実現可能性による3群（実現可能・実現不可能・希望無し）とのあいだには、有意な関連は無かった (Table.7)。大学生においては、社会をどのように捉えているかということと自身の希望の保有とは独立していると言える。このことは、大学生が有する希望の内容が多側面に渡っていること (Table.2) とも関わっていると考えられる。選択肢として提示した中で「仕事」「社会貢献」以外の8つ（例えば、「遊び」「友達との関係」など）は、社会の捉え方とは無関係に自己完結的に希望を保有し、実現を達成できる領域である。このことから希望内容として「仕事」「社会貢献」を選択した者のみに対象を限定して社会観に基づく3クラスターと希望保有・実現可能性による3群とのあいだの関連について分析を試みたが、有意な関連は無かった。大学生が、社会の捉え方から切り離して自らの希望を保有し、その実現可能性に

ついて推測を行っているか否かについては、測定尺度の適切性も含め、今後、検討すべき課題であろう。

社会観の違いが時間的展望に及ぼす影響について分析した結果 (Figure.3), 将来に対する肯定的志向性において、社会不信群が社会葛藤群に比して有意に低かった。また、現在の充実感において、社会不信群が他の2群に比して有意に低かった。さらに、過去の受容において、社会不信群は、社会信頼群に比して得点が有意に低かった。すなわち、時間的展望体験の各下位尺度得点において社会不信群が他の群に比して得点が低いという共通点があった。社会不信群は、社会不正・非寛容性に対する否定的評価が他の群に比して高いことが特徴的であり、その特徴が将来・現在・過去の3時点に対する評価に抑制的に影響したと考えられる。このことは、大学生にとって社会の捉え方が自身の時間的展望に影響すること、とくに社会不正・非寛容に対する否定的評価の影響が大きいことを意味すると言えよう。大学生対象の調査において、社会を肯定的に捉えている者ほど時間的展望体験の各側面について肯定的な捉え方をしていることが示されている (五十嵐,2020)。両研究のあいだには、一貫性があり、大学生にとって社会をどのように捉えているかは、自らの時間的展望に影響を与えることが示された。

残された課題

本研究においていくつかの課題が残された。

一つには、今回、希望内容について用意した選択肢から複数選択をさせるという手続きで結果を得て、それに基づく分析を行った。しかし、この手続きでは、希望の具体的内容は必ずしも明らかにされない。例えば、希望内容として仕事を選択した際、その仕事を通して困窮者の力になりたいといったケースとその仕事に就くことで得られる自身の社会的安定・保障を目的とするケースとを区別することができない。希望の具体的内容についてより詳細に検討できる調査手続きが必要であろう。

他の一つに、希望の逆機能といった事柄について、より詳細に検討する必

要がある。本調査において、希望を保有しながら、それが実現不可能と推測する者は、希望を持たない者と比しても過去・現在の捉え方に否定的な効果を及ぼす可能性が示唆された (Figure.1)。児美川 (2016) は、キャリア教育の中で夢を持つことを強調しすぎることが青年を追い詰める危険性があることを指摘し、夢と現実との折り合いをつけること、多様な働き方がありうることを青年に示すことが重要だと述べている。また、玄田 (2010) は、付与の条件としてではなく、自ら能動的に希望を探し、獲得することの重要性を強調している。青年自身で実現可能な希望を見いだす、あるいは、既に保有している希望の実現に向けて行動する過程において、どのような教育的支援が必要かつ有効かについて、今後、実証的検討が必要とされる。

最後に、今回の調査対象が大学生および看護学生としたことによる研究知見の一般化の程度に関して課題が残る。大学への進学率は、全国平均で5割を超える現状にあるが (文部科学省, 2020)、高校卒業後に就職する者も常に一定割合、存在する。とくに本調査が実施された沖縄県の大学進学率は、全国平均より1割程低い。これらのことから、有職の青年を調査対象に含めることにより、大学生の特徴はより明らかになり、本研究知見の一般化の程度も広がることが期待される。

引用文献

玄田有史 (2008). 希望と個人 (Ⅱ) 社会科学研究所 59 (3-4) ,1-19.

doi.org/10.34607/jssiss.59.3-4_1

玄田有史 (2009). データが語る日本の希望—可能性, 関係性, 物語性—
東大社研・玄田有史・宇野重規 (編) 希望を語る—社会科学の新たな
地平へ— (pp.127-172) 東京大学出版会

玄田有史 (2010). 希望のつくり方 岩波書店

日潟淳子・齋藤誠一 (2007). 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 第 18 巻第 2 号, 109-119.

doi.org/10.11201/jjdp.18.109

- 五十嵐 敦 (2020). 大学生の生活行動と社会観や時間的展望との関係—
キャリア形成としての大学生活の充実について検討する— 福島大学
人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要 (2) 29-36.
- 石井 僚 (2016). 時間的展望とアイデンティティ形成との関連：形成プロ
セスとプロダクトの両側面からの検討 発達心理学研究, 第27巻第3
号, 189-200. doi.org/10.11201/jjdp.27.189
- 児美川孝一郎 (2016). 夢があふれる社会に希望はあるか KK ベストセラーズ
Lewin, K. (1951). *Field Theory and Social Science*. New York : Harper.
(レヴィン, K. 猪股佐登留 (訳) (1979) 社会科学における場の理論 (増補
版) 誠信書房)
- 峰尾菜生子 (2017). 大学生における日本社会に対する社会観の特徴—自
由記述に基づく社会観尺度の作成と妥当性の検討— 青年心理学研
究, 28, 67-85. doi.org/10.20688/jsyap.28.2_67
- 文部科学省 (2020). 学校基本調査—令和2年度 結果の概要—
- 白井利明 (1990). 現代青年の未来展望における対社会関与に関する研究 (1)
—中学生を対象に— 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 第39巻第1号, 59-73.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研
究, 65, 54-60. doi.org/10.4992/jjpsy.65.54
- Shirai Toshiaki (1997). *Time Orientation and Identity in Adolescence and Middle
Age. Memoirs of Osaka Kyoiku University. Ser. IV, Vol.45, No.2* 207-226
- 白井利明 (1999). 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関
する追跡的研究 (I) —91年度大学入学コーホートにおける時間的展望
と自我同一性の5年間の変化— 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 第47巻
第2号, 335-342.
- 白井利明 (2001). 希望の心理学—時間的展望をどうもつか— 講談社
- 白井利明 (2003). 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関

する追跡的研究（Ⅴ）—卒業後４年間のアイデンティティと時間的展望
の規定関係— 大阪教育大学紀要, 第Ⅳ部門, 第52巻第1号, 23-31.

園田直子・森川美希 (2005). Sense of Coherence からみた大学生の自己概念
久留米大学心理学研究, 4巻, 35-42.

杉山 成・神田信彦 (1996). 青年期における一般的統制感と時間的展望
—アパシー傾向との関連性— 教育心理学研究, 44, 418-424.

doi.org/10.5926/jjep1953.44.4_418

東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト (2006). 仕事と生活に関する
アンケート調査 <https://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/chosa-hyo/0689c.pdf>

(参照日 2021年10月24日)

都筑 学 (1999a). 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中
央大学出版部

都筑 学 (1999b). 大学2—4年生の進路選択と時間的展望 教育学論集
41.119-137.

都築 学 (2004). 希望の心理学 ミネルヴァ書房